

ションのモデルとしてではなく、「現在」生成されつつあるものとして研究できる可能性がある。

#### 質問とそれへの答え

指定討論者の内田氏からは「対話仮説」の意味するところについて、村井氏からは盲人に手振りが無いことについてどのように（価値判断）考えるかとの質問があった。

内田氏の質問に対しては、コミュニケーション(対話)という単位を考慮することで表象論が変化することを指摘した。手振りのデータは、表象が行為・コミュニケーションのプロセスとして研究できること、すなわち表象が発話と身振りそのものとして観察できることを示唆している。かつてウェルナーは「音声的身振り」という用語で発話に含まれる身体について述べたが、言語手振りは身体に含まれる「言語的」なものについての概念であり両者は同様なものを指している。

村井氏の質問に対しては、盲人の思考がこのようなものであるとか、晴眼者の思考がこのようなものであるといった特性の記述に興味があるのではなく、それぞれの思考がどちらも身振りの有無と関連していること自体が興味深いのであり、いろいろな身振りから思考が発生してくることを研究の1つとして盲人や聴覚障害者を対象にしていきたいと答えた。

#### 指定討論者

##### 内田 伸子

いずれも重点領域の研究の一部門として、アプローチの仕方も研究目標も異なる研究であるが、第1に、各自の見いだした興味深い知見を総合するという目標のもとで、第2に、自分の研究を反省するという目標のもとで聞かせていただき、大きな示唆を与えられた。私の実施している幼児を対象にした実験もコミュニケーション場面的一种であるが、実験者によって子どもの産出する言語反応の豊かさがまるで違う。エキスパートの実験者とノーヴィスの実験者が実験している場面をビデオにとって比較すると、実験者が子どもにかけることばの内容は殆ど差がないのに、ことばをかけるタイミングや話しかける調子、子どもの反応を待つポーズの時間、イントネーション、うなづき、表情やからだの動きといったことばに伴う身ぶりがまるで違うのである。さらに両者の内観も異なっており、エキスパートは子どものことばを聞くのが楽しくてたまらないのに対して、ノーヴィスでは楽しさを感じずゆとりはないようである。本シンポジウムにおける各提案は、このような実験事態での大人と子どもの相互交渉をコミュニケーションとして捉え、うまく子どもとしゃべれないのはなぜかを考える上でも非常に

示唆が大きかった。

鯨岡氏の「関与者側の強い期待や願いが背景化され、子どもの姿をありのままに受けとめられるような態度に自然に切り替わることが子どもの気持ちを間主観的に受けとめられる基底的条件である」という提案は、まことに説得的だが、多くのコミュニケーション障害は、子どものあるがままの姿を受け入れることが困難な故に生じているものと思われる。①どのような条件のもとで関与者は子どもをあるがままに受け入れることができるようになるのであろうか、②2者関係の変容を引き起こすために、指導の文脈で研究者は何ができるのであろうかについて知りたい。これに対して、常識的な価値の枠組みを意識的に動かさないとならない、母親や保育者の目と研究者の往復運動をする必要性が指摘された。

井上氏は「子どもと環境の間により折り合いを保ちつつ相互交渉を行う条件はなにか」について独自の見解を述べ、「治療者はそのような相互交渉の橋渡しをするために学習素材を準備する」と述べておられるが、①「学習素材」とはそもそも何で、②どのような原則のもとに準備され、③その適切性の判断はどのようになされるのかについて知りたい。井上氏から子どもが生きる状況を大切に、行動の始まりと終わりを子どもが明確に捉えやすくすることを原則にしている旨の回答がなされた。

天野氏の遅滞児を対象にした長期に渡る実験教育の成果の学界への貢献は大きい。とりわけ構造依存的なことばで表象を表出することができるためには、内的図式が形成されることによる内言の発生が基盤になっている点を明らかにした点が意義深い。しかもこの内的図式が形成されるのにはある程度のドリル学習の必要性を示したことも、Premack方式を遅滞児の言語訓練に応用して成功したCarrierのNon-SLIPプログラムと軌を一にするもので興味深い。訓練室では訓練された言語形式を使えるのに、母親や担任に対しては使えないという事実は、単に彼らの思考のrigidityだけで説明されるものなのか。訓練は「経験のコミュニケーション」(Luria)の範囲において有効であると述べている点から、訓練事態が子どもにとってどういう意味を有しているのか、また訓練によって形成した内的図式はどのようなものなのかなど興味がかれる。

佐々木氏の提案は、言語と認識の基本的問題に迫るアプローチである。操作や映像的処理を必要とする課題ほど、また視覚的要素が制限されるほど身ぶりが増加するという事実は、身ぶりが問題解決に関与していることを示唆しているが、①関与の仕方についての説明を「二重表象仮説」から「対話仮説」に変更することにより、どのような心理的過程が生じていると想定されるようにな

るのか、②なぜ言葉とは異なる様式である身ぶりを使用するのかという問いに対して、①表象やプラン、思考を考へる枠組みそのものがガラリと変化したこと、②言葉も身ぶりであり、身ぶりによって思考を実現しているのだという主旨の回答がなされた。

## 指定討論者

村井 潤一

4人の発表は、いずれも個性的であり、興味深く拝聴し、個々に質問もさせていただいたが、ここでは、本テーマのシンポジウムの中で、漠然とであれ考えさせられたコミュニケーション障害ということばについて述べてみたいと思う。

鯨岡は、「コミュニケーションとは、言語的、非言語的を問わず、一般にコミュニケーションと言われる行為においては、様々な情報の授受を越えて、間主観的な他者理解、例えば、相手の意図の把握や、情動の感得、共感等々が随伴されており、そのことが当事者の「コミュニケーションが成り立った」という実感の重要な構成要素となっている……。従って、心身障害児をめぐるコミュニケーション障害も、問題は、従来のように単に障害児の伝達、表現機能上の問題に焦点化して捉えるべきではないし、またその指導・教育も、障害児の側のコミュニケーションという観点からのみ捉えられるべきではない……」としている。

井上も、表現こそ異なるが、コミュニケーションの障害児を子どもと環境との相互交渉の発現、展開が円滑に行われない状況にある子どもとしてとらえ、従来のコミュニケーション障害の問題を、子どもの側からのみとらえるのに反発している。村井も原則的にこの考えに賛成である。

しかし、ここに問題が生じる。コミュニケーション障害を相互関係の障害としてとらえる場合、障害児側の問題としてとらえてきた観点を、環境の側（母親の養育態度や、社会の障害児への理解等）に問題があるとするところによって、相互的にとらえる場合と、あくまで関係の障害としてとらえる場合との2つがあるような気がする。この2つは似ているようであるが基本的に異なっている。

前者の場合は、表現はともかく、健常者（母親、教師等）に対するコミュニケーション障害児の存在が前提としていられる。（受容の対象であれ、援助の対象であれ）、そして視点を変えることによって、より良い関係状況を作っていくという意図が秘められている。井上のことばで言えば、折り合った状態をいかにして作るかということになるろうし、鯨岡のことばでいえば、関与者（母親、教師等）が子どもの気持ちを間主観的に把握することが、その後のコミュニケーション関係の展開に重要な役割を果たすということになるろう。

しかし後者の場合は、関係の一方が訓練され、理解される対象である必要がない。すなわち、両者の関係には何の前提ももうける必要がない。たとえ一方が障害児と呼ばれる子どもであってもである。

また、このシンポジウムでも、コミュニケーション障害が起きているかも知れない。この場合は、コミュニケーション障害者といわれる人がいなくても、コミュニケーション障害が生じうることになる。このような立場に立てば、コミュニケーション障害の問題は、障害者と健常者の関係を越えて、より普遍的に捉えられる。

考えてみると、私たちが障害児と関わる場合、健常者同志との関わりと同様、常に教育的である必要はない。（もちろん、教育的関わり的重要性を否定するものではない）。より基本的には、日常的な関係をいかに構築するかであろう。私たちの日常的コミュニケーションでは、種々のレベルのコミュニケーションがあり、常に本人の能力の最高のコミュニケーションを期待しているとは限らない。話しが通じない場合も、常に存在するし、何となくわかってもらえれば十分な場合も存在する。より正確にわかりたい場合も存在する。また障害に直面したから、新しい発展がみられた場合も存在する。

ゆえに、コミュニケーション障害の問題はコミュニケーション障害を取り除くのではなく、障害を内に含みながら、可能な限り、お互いに多様に、場合によっては気楽につき合っていく、こういう関係を構築していくという視点が、教育的視点以外にあっても良いのではなかろうか。